炎症

使用器具

患部となる臓器の外膜に発生する赤い発疹。炎症発生時に注射器を選択すると、自動的に回復薬の横に青色の消炎剤が出現する。注射器でそれを吸引し、炎症部位に直接投与することで治療できる。

●炎症の手順

❶ 注射器 ………患部に消炎剤を打つ

❶注射器
SYRINGE

炎症以外の部位に投与するとMiss判定でやり直し。時間がかかるだけで手術評価には影響しない。

血だまり

傷口や腫瘍などからあふれ出た血を吸引し、その下にある患部を見えるようにする処置。使用する器具はドレーン。吸引する血液の量は患部ごとに違うので、*Ok*と表示されるまで吸引を続けること。

●血だまりの手順

❶ ドレーン………血を吸い取る

❶ドレーン
DRAIN

血だまりがあるあいだは、その下にある患部は処置できない。出血したらすみやかに吸引しよう。

小腫瘍

患部に発生した出血をともなう小さな腫瘍。デキモノやポリープなどはこれらに含まれる。小腫瘍は摘出が困難なため、レーザーで焼却、止血し、そののちヒールゼリーを塗布という術式で治療する。

●小腫瘍の手順

❶ レーザー………腫瘍を焼却

❷ ヒールゼリー …傷痕に塗る

❶レーザー
LASER

焼却時に、患部以外の部位を長時間照射すると出血してしまう。的確なレーザー照射を行なうように。

レーザー痕

小腫瘍の治療中に患部以外をレーザーで照射し、出血を発生させてしまったら、すみやかにドレーンで血だまりを吸引し、ヒールゼリーで傷痕を治療すること。冷静に対処すれば、大きなミスにはならない。

●レーザー痕の手順

❶ ドレーン………血を吸い取る

❷ ヒールゼリー …傷痕に塗る

❷ヒールゼリー
ANTIBIOTIC GEL

ヒールゼリーの塗布は、複数のレーザー痕にかかる位置で行なうとすばやく処置をすませられる。

血栓

使用器具

血栓とは、血管の中にできる老廃物の塊を指す。これを摘出する術式では、5つの器具をすばやく扱う技術が求められる。まずは血液中を流れてくる血栓の位置をエコーで捉える。血栓が表示されたらピンセットでつまんで停止させ、その表面の血管をメスで切開。切開部からドレーンで血栓を吸引し、ヒールゼリーで傷口をふさげば処置完了だ。なお、ひとつの血栓にかまっていると、見逃したほかの血栓が臓器へと流れ込んでしまう可能性がある。血栓は複数まとめて処理しよう。

評価・判定ポイント

- エコー表示時に血栓を見逃さない
- 止めた血栓が動き出すまえに処置

●血栓の手順

❶ スキャナ………ルーペ機能で患部を拡大

❷ スキャナ………エコー機能で血栓を表示

❸ ピンセット ……血栓の動きを止める

❹ メス……………血栓表面の患部を切開

❺ ドレーン ………切り出した血栓を吸い取る

❻ ヒールゼリー …傷をふさぐ

❷スキャナ(エコー)
ULTRASOUND

血栓は点滅しながら流れている。すべての血管にエコー探知を行ない、見逃しをなくすことが重要。

❻ヒールゼリー
ANTIBIOTIC GEL

手順❹の切開後、吸引前にヒールゼリーを使うと血栓が再び動き出す。手順ミスに注意しよう。

動脈瘤

動脈瘤は、注射器による投薬やガイドラインの切開、異物除去とドレーン、そして縫合と、これまで身につけた技術を結集させ、ひとつの術式としてその処置を行なう。すべてを一気に行なうのではなく、鎮静液の投与から摘出までをひと区切りとして進め、その後に血だまりの吸引から血管の縫合を行なうというように、全体を2段階に分けて処置すると成功しやすい。

評価・判定ポイント

- 切開時にやり直しなし
- 瘤の摘出時にミスなし
- 血だまりの復活なし
- 血管を吻合時にミスなし
- 縫合線の長さ、幅、中心位置、傷に対する角度が正確
- 折り返し回数が規定数以上ある

●動脈瘤の手順

❶ スキャナ………ルーペ機能で術野を拡大

❷ 注射器 ………動脈瘤に鎮静液を打つ

❸ メス……………瘤の周囲を切開

❹ ピンセット ……切開した瘤を摘出

❺ ドレーン ………血だまりを吸引

❻ ピンセット ……切断された血管を吻合(くっつける)

❼ 針と糸 ………血管の吻合部を縫合

❽ スキャナ………ルーペ機能を解除

❸メス
SCALPEL

瘤は時間とともに膨らみ、最後には破裂する。ガイドラインが表示されたらすばやくメスを入れよう。